

4-1-5 第一専門診療部

4-1-5-1 消化器科

1. 概要・特色

人の入れ代わりが激しい1年で、8月に医長が交代し、9月から3月の間は医員が産休をとり、8月以降は、総合診療部の協力を得て、外来・入院患者の診療を続けた。その分、総合診療部の教育には力を注がせて頂いた。

炎症成長疾患の診断治療には特に力を入れており、8月からの8ヶ月間で、新規で7人のクローン病患者と7人の潰瘍性大腸炎患者を経験した。

生体肝移植を必要とする劇症肝炎、重症肝不全患者の診療にも移植免疫科・集中治療部とともにあたってきた。

外来では、炎症成長疾患患者のフォローに加え、重症便秘症、過敏性腸症候群、肝機能障害などの診療を中心に行い、患者・家族からの高い評価も受け、患者数も確実に増えてきた。

2. 診療活動

2.1 炎症性腸疾患の診断・治療

難病といわれてきたが、その罹患率が上昇を続けている潰瘍性大腸炎・クローン病といった炎症性腸疾患の診療には特に力を注いできた。内視鏡検査と放射線科の協力を得ての適切な診断と、免疫調整剤や抗サイトカイン療法の早期からの積極的な導入により、栄養療法を最小限とするなど、患者のQoL改善にも力を注いできた。

小児の炎症性腸疾患の一大拠点として、疾患と成長の問題、QoL向上に関しての臨床研究も進めている。

2.2 便秘症・過敏性腸症候群

便秘症や過敏性腸症候群といった機能性の腸疾患に関しても、器質的疾患の適切な除外と、積極的な薬剤療法により、患者のQoLを大きく改善してきた。

両親へ、病態と薬剤の影響を十分にご説明することで、家族の理解と協力を得る努力を惜しまなかったことが患者と家族の満足感につながったと考えている。

学童の消化器症状には心因的要素が強い影響を及ぼしていることも少なくなく、適応があると判断すれば、「こころの診療部」の協力も得て、患者のニーズに応えている。

2.3 その他の消化管疾患

その他の消化器疾患として、乳幼児期の血便精査のための大腸ファイバーやポリープ切除術、乳児期からの血便をはじめとする消化器症状の原因としての好酸球性胃腸炎の診断治療にも積極的に取り組んでいる。

2.4 肝疾患・肝機能障害・代謝性疾患

肝機能障害の評価目的のコンサルトを病院内外から多く受けている。

ウイルス性肝炎や胆道閉鎖症、自己免疫性肝炎、ウイルソン病などの肝疾患に加え、シトリン欠損症や尿素サイクル異常、糖原病などの代謝性疾患の診断と治療、外科や遺伝診療科の協力も得ながら積極的に行ってきた。

2.5 生体肝移植

移植免疫科の大発展の中、劇症肝炎、重症肝不全などの生体肝移植を必要とする患者が激増した。劇症肝炎の原因検索、重症肝不全の術前管理などを移植免疫科、集中治療部と協力して行わせていただいた。